
ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド

春風コンビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド

【Zコード】

Z5458Z

【作者名】

春風コンビ

【あらすじ】

パラレルワールド

それは、決して交わることのない並行世界。

だがある日、アマノ・ハルカという少女のウルトラマンに対する憧れを何者かに利用され、変わり果てたコスモスの世界へと連れてこられてしまう。

世界を元に戻すため、自分の世界に帰るため、コスモスとハルカの戦いが今始まる。

設定紹介

<世界観>

テレビシリーズのコスモスと同じの西暦2009年。
(テレビシリーズ同様に途中で2010年になる)

アマノ・ハルカはパラレルワールドからやってくる。
ハルカの住む世界は、コスモスの放映開始から10年が経った2011年。

コスモスは、パラレルワールドではテレビ作品、コスモス世界では現実に存在している。

コスモスはハルカにとって憧れの存在。

<登場人物>

アマノ・ハルカ
16歳。

この物語の主人公。

10年前、コスモスをテレビで見てからウルトラマンが好きになる。
好きなウルトラマンはコスモス、ダイナ、メビウス、ゼロ。
コスモスがテレビ番組として存在する世界からコスモスの世界にやつてくる。

世界を元に戻すため、元の世界に帰るためにEYESに入隊する。

春野ムサシ

19歳。

この物語のもう一人の主人公。

コスモスと一体化しているEYESの隊員。

コスモス世界での8年前にコスモスと心を通わせた経験をもち、その時に約束した「真の勇者」になるために奮闘するが、コスモス世界に起きた危機を知り、世界を元に戻す戦いにも身を投じる。

ヒウラキャップ

33歳。

EYESの隊長。

考えるよりまずは実践派だがときには豪胆な一面を見せる。
本名は「日浦晴光」

シノブリーダー

28歳。

EYESの副隊長。元防衛軍だが一匹でも多くの怪獣を保護したい
という願いからEYESに入隊した。

パイロットとしても優秀。本名は「水木忍」

フブキ隊員

23歳。

シノブと同様に元防衛軍のパイロット。

ムサシとはよく激突するが怪獣保護という信念は同じである。

本名は「風吹圭介」

ドイガキ隊員

25歳。

自称天才科学者と言うだけあって博識で武器開発や作戦立案をする
が、臆病な一面もある。

本名は「土井垣浩次」

アヤノ隊員。

19歳。

ムサシの10ヶ月先輩。通信・分析オペレーターでEYESが所有
するハイエンドコンピューター「エイジヤーMAX」を使いこなす。
好奇心旺盛で子供っぽさを残すが子ども扱いされるのを嫌っている。

本名は「森本綾乃」

設定紹介（後書き）

このほかにも人物は出てきますがメインはこの7人です。正確にはコスモスも入りますが。

ほかは作品中で紹介していきます。

ダイナとメビウスも登場させようと思つています。
これからよろしくお願いします。

第1話「優しさと強さの英雄」（前書き）

今回より本編スタートです。

この物語は私の思い付きではじめました。

かなり長めになりましたが私のコスモス好きを分かってもらえれば幸いです。

新参者ですが宜しくお願いします。

第1話「優しさと強さの英雄」

西暦2001年7月7日

その日は私にとつて忘れることが出来ない日だ。

忘ることのできない理由はある英雄との出会いである。

その英雄は月の優しさと太陽の強さを兼ね備えた巨人、ウルトラマンコスモス。

それをきっかけに私はウルトラマンが好きになり、ウルトラマンダイナ、ウルトラマンメビウス、ウルトラマンゼロも好きになった。コスモスとの出会いから10年。2011年の今、当時6歳だった私は16歳になった。10年経った今でもウルトラマンに対する思いは変わらない。

私の名前は、アマノ・ハルカ。ウルトラマンに対する思いは誰にも負けない！！

今日も彼女はコスモスのDVDを見ていた。

「いつ見てもコスモスは最高だ。」

コスモスはTVシリーズが始まつてから10年が経ちその記念にメモリアルDVD - BOXが発売されていた。

コスモスはこれまでのウルトラマンと違い、怪獣と可能な限り戦闘を避け、怪獣保護チームであるTEAM EYESと共に保護する。そこにコスモスの優しさが現れている。だが無慈悲な異星人や力オスヘッダーなどに対し、立ち向かうこともある。そんなコスモスとそれを支えるEYESにハルカは憧れていた。DVDを見終えたハルカは片付けながら呟いた。

「コスモスの世界に行けたらいいのになあ。」

コスモスの世界に行く。それは彼女の願いでもある。コスモスとEYESに憧れているからこそ、その信念に賛同している。彼女は、怪獣たちを保護したいとも願っている。

そんなこととは知らないコスモス世界では・・・。

ここはEYESの基地トレジャー・ベース。太平洋上に人工秘密基地として建造された。

基地には、人々の気分を落ち着かせてくれる自然が大量にある。春になれば、桜となつて心を癒してくれる。

指令室では、隊員たちが休憩していた。指令室は隊員たちのコミュニケーションの場となつていていたため、全員が休憩をとることは珍しくない。

「久しぶりですね。こうして、お茶するなんて。」

そういうつていいるのはEYESの副隊長のシノブだ。

「まあここ最近は何かと忙しいからな。」

とEYESの隊長のヒウラが続けた。

ここ最近は、何かと忙しくなつていて、そのため、全員が指令室で休憩することがなかつたのだ。

「またジンクスじゃないのか?」

フブキが皮肉交じりに言つた。

EYESには変なジンクスがある。それは、誰かが入隊すると何かが起ころるというものだ。アヤノが入隊した時も大変なことが起き、ムサシが入隊した時にはカオスヘッダーに襲来されるという嫌なジンクスだ。

「いや誰も入隊してませんよ。」

とムサシが答えた。

ムサシはアヤノと同じ年ではあるが10ヶ月後輩である。さらにムサシには、誰にも知られていない秘密がある。

ウルトラマンコスモスと一体化していることだ。リドリアスがカオス化してしまつた際にコスモスと一体化したのだ。

「でも、これから誰か来るかもしけないね。」

トイガキが予想して言つてみた。

「でも、これ以上のジンクスは嫌ですよ。ねえ。」

と全員に向かって言つたのはアヤノだ。

すると全員が「うん。」と言わんばかりにうなづいた。

しかし、このところ世界に異変は起きている。

コスモスの世界にいるはずのない宇宙球体スフィアが確認されたり、検知されることのなかつた時空波が検知されたりしているのだ。それにカオスヘッダーも活動している。

これが、世界に危機をもたらしていることには誰も気づく由もなかつた。

ハルカの世界ではすでに夜になっていた。ハルカはすでに寝ていたが、不思議な夢を見ていた。

ハルカは、歩いていた。どこと知らない場所を一人で。

「ここは一体？」

すると後ろから声をかけられた。

「アマノ・ハルカ」

ハルカは後ろに振り返った。すると、ウルトラシリーズの映画で見たことのある白いドレスに赤い靴を履いた少女が立っていた。

「君は、赤い靴の少女！？」

と驚きを隠せない表情で言つた。その少女は、それを気にもとめず

に言つた。

「あなたのこと必要としている世界があります。」

「私を必要としている世界？」

疑問気に聞き返した。

すると少女の顔が悲しげな顔に変わった。

「その世界は絶対に交わることのない世界が交わってしまっている。

そしてそれはあなたがよく知っている3つの世界・・・」

そう言われたハルカは思い当たるものがあった。だが、ハルカにはあり得ないことだった。

「まさか、コスモスとダイナとメビウスの世界の融合？」

しかし、少女は答えることもなく続けた。

「急いで。でないと世界が滅んでしまう……」

「分かった。なら私は行くよ。」

そこでハルカは目を覚ました。すると、部屋の中に夢の中にいたはずの赤い靴の少女がいた。

「うわあー！」

驚いたハルカはベッドから転げ落ちてしまった。

「大丈夫ですか？」と少女が手を差し伸べてきた。

「ありがとう。」といつて立ち上がった。

「君は何者なの？どうして私なの？」

ハルカは疑問に思ったことを聞いてみたが少女は笑みを浮かべるだけで何も答えなかつた。

「さあ行きましょう。」と少女が言つと光の扉のよつなものが現れた。

ハルカは少女に導かれるままその中に飛び込んだ。

だが、ハルカは自分の思いが利用されたことに気づいていなかつた。

コスモスの世界も夜になり、ムサシたちも寝ていた。

このときのムサシは知らないことだがハルカと同じ夢を見ていた。ライトブルーの隊員服姿のムサシの目の前に赤い靴の少女が立つていた。

「君は？」

とムサシが聞いたが何も答えなかつた。すると少女が笑みを浮かべながら言った。

「ウルトラマンコスモス。この世界をよく知る少女が現れる。」

「君、どうして僕のことを？それにこの世界をよく知る少女って。」

「あなたよりこの世界を知っているわ。」

ムサシがコスモスであることは一切答えずに言つた。そこでムサシは目を覚ました。

「今のは何だったんだ？」

時計を見るとすでに朝になつていた。

とつあえず気持ちを落ち着かせたムサシは隊員服に着替えて部屋を出た。

朝食を食べたムサシはいつものように指令室に入った。

「おはようございます。」

するとフブキがムサシに詰め寄ってきた。

「ムサシーお前はお子ちゃまかー? 何時まで寝てる気だよー。」

アヤノとダイガキがつぶやいた。

「またやつてる。どっちがお子ちゃまなんだか・・・」

「うん。そういうフブキだつてさつき起きてきたばっかなのに。」

二人が話していたのが聞こえたのかフブキは口パクで「言うな。」

と言った。

「それにしてもどうしたんだ? ムサシが寝坊だなんて。」

ヒウラが聞いた。

「いや、ちょっとおかしな夢を見て。」

「おかしな夢?」

とシノブが聞き返した。

「ええ。随分とほつきりした夢でしたよ。この世界をよく知る少女が現れるって。」

「どういう意味なんだ?」

とヒウラが聞いた。

「僕にもよく分からないんです。でも、最近起こってる異変と何か関係があるかも知れませんね。」

そういう終えた時、指令室に警報音が鳴り響いた。

ダイガキとアヤノがエイジヤーマックスを操作して状況を伝えた。

「瀬黒丘陵に怪獣出現!」

「10キロ先には、住宅地があります!」

「よし、TEAM EYES出動!」

「了解!」

格納庫では、出撃準備が行われていた。

EYESのライドメカにはコアテックシステムが採用されている。オレンジとシルバーのコアモジュールを核に前後にパーツを組み合わせることによりあらゆる場面に対応できる万能メカである。

フブキとヒウラが搭乗するのは前後に赤とシルバーを基調とするA 1、A 2パーツを取り付けた超高速機動型のテックサンダー1号。一方、シノブ、ドイガキ、ムサシが搭乗るのは前後にB 1、B 2パーツを取り付けた特殊保護機型のテックサンダー2号。このほかに前にA 1、後ろにB 2パーツを取り付けた特殊支援機型のテックサンダー3号、前にB 1、後ろにA 2パーツを取り付けた特殊高速機型のテックサンダー4号がある。

「テックサンダー1、オールチエックグリーン。」

「テックサンダー2、オールチエックグリーン。」

とヒウラとトイガキが伝えた。

「テックサンダー1、テイクオフ！」

「テックサンダー2、テイクオフ！」

30分ほどで現場にテックサンダー2機が到着した。

怪獣を見て、トイガキが記憶の中から名前を引っ張り出した。

「あー。あれはゴルメデですね。」

「ゴルメデ？」

とシノブが聞いた。

「ええ。以前SRCが捕獲に失敗した怪獣です。」

以前ゴルメデが出現した際、EYESの母体組織であるSRCが捕獲しようとしたのだがその凶暴性に捕獲することができなかつたのだ。

「トイガキ、例のエネルギー反応は？」

例のエネルギーとは、以前リドリアスを凶暴化させた光のウイルスのことだ。リドリアスに取り付く前には異常なエネルギーで街一つを壊滅させたほどであるために警戒しているのだ。

「カオスヘッダー反応はありません。」

「カオスヘッダー？」

とヒウラが聞いた。

「ああ。あれに名前をつけてみたんですよ。」

「カオスヘッダーか。」

それを見つめる少女がこの世界に辿り着いた。

光の扉の中からアマノ・ハルカが現れた。

「こには？」

周りを見回すとハルカにとつて見覚えのある怪獣が目に入った。

「古代怪獣ゴルメデ！？」

そこで自分が今どの世界にいるのか理解した。

「まさかここはコスモスの世界！？」

しかしそれは有り得ないことだ。さっきまでハルカはコスモスがTV作品として存在する世界にいたのだ。

だがそのありえないは今、覆つてしまつたのだ。上空を見るとテックサンダーがいる。

「テックサンダーだ。ゴルメデを保護する気なんだ。」

シノブが異変に気付いた。

「キヤップ、地上に人が！」

「なんだと！？逃げ遅れたのか？」

「僕が救助します！」

ムサシがすぐに答えた。

「この状況でどうやつて？」

「フブキ、ゴルメデをなるべく引き離すんだ。」

「了解！威嚇弾発射！」

1号機からゴルメデの足元めがけて威嚇弾が放たれた。その隙に2号機は、ハルカの近くに着陸し、ムサシが降りてきた。

「君、早くここから逃げるんだ。」

だがハルカは、田の前にムサシが現れたことに驚いていた。

「え、ムサシ隊員？」

ムサシは初対面のはずの彼女が名前を知っていることに驚いた。

「どうして、僕の名前を？」

すると近くに爆発がおこった。ムサシはハルカに覆いかぶさるよう

に伏せた。

「ありがとうございます。」

「早くここから逃げるんだ。この怪獣は僕らが保護する。」

「はい。この怪獣は凶暴ですからくれぐれも注意してください。」

ムサシは、多くの疑問を抱いたが気にすることなく現場に戻った。

2号機はムサシを降ろしたあとすぐに現場に戻っていた。1号機と共にムサシたちに向かわぬように威嚇射撃をしていた。

「皆、捕獲オペレーションスタート！」

捕獲オペレーションとは怪獣を捕獲するためにとるもののことだ。

「了解！ 麻酔弾発射！」

1号機から麻酔弾が放たれた。怪獣に命中し、地面につづくまつた。その隙に、ゴルメデ上空に2号機が滯空した。「レーザーネット発射！」

！」

2号機から水色のレーザーをまとったネットが放たれた。これは怪獣に危害を加えることなく捕獲できるものだ。

ゴルメデはネットに入れられたが抗うようにネットを破壊した。その衝撃に耐えられずに2号機が墜落してしまった。

それを地上で見ていたムサシはすぐに行動を起こした。

「リーダー、トイガキさん。くそっ！」

腰にホルスターされているラウンダーショットの前後にガンコニッシュを取り付けゴルメデに狙いを定めた。トリガーを引くと閃光弾が放たれた。

「ゴルメデ、こっちだ！」と言いつつ誘導弾を放った。

ハルカは墜落した2号機に向かっていた。

2号機のコクピットには気を失っているシノブとダイガキの姿があった。

「シノブリーダー、ダイガキ隊員大丈夫ですか？」

すると、2人は意識を取り戻した。

「あ、あなたは？」

「どうしてテックサンダーに？」

「説明はあとでします。今はここから脱出を。」

ハルカに言われるまま2人はハルカと共に脱出した。

「アイツ、一人で無茶しやがって。」

とフブキが愚痴をもらした。

「しかし、2号機が墜落した以上はやるしかない。フブキ、援護だ。」

「了解。」

ゴルメデに攻撃を仕掛けた。だがムサシに向かってゴルメデが攻撃した。ムサシはなんとかかわしたが、追い詰められてしまつた。目の前に崖が迫つていたのだ。

「しまつた、これ以上は・・・」

だが無情にもゴルメデに攻撃されてしまつた。

「うわあー！」

ムサシは崖に落ちてしまつたが諦めてはいなかつた。コスモプラックを手にしていた。

「ウルトラマンコスマース！」

すると、ムサシはウルトラマンコスマスとなつて、ゴルメデの前に降り立つた。

「ウルトラマンコスマス！？」

ハルカは憧れの存在を目の前に期待していた。

「あなた、どうしてコスマスのことを？」

「君はなぜここに？」

2人はハルカに聞いたがハルカは何も答えなかつた。

コスモスはファイティングポーズをとると向かつてきたゴルメデの攻撃をすべて受け流した。

お返しとばかりに手刀などといった相手を傷つけない攻撃を繰り出し、最後にルナホイッパーでゴルメデを投げ飛ばした。

そしてコスモスは、両手を体の前に持つてきたあとに両手を振り上げ、右手を突き出した。右手から虹色の光線、フルムーンレクトを繰り出した。

フルムーンレクトは、相手を沈静化させる慈しみの光線である。ゴルメデはすぐに大人しくなつた。

「ゴルメデが大人しくなつた。」

シノブが安堵の声を上げた。だが安心するのは、まだ早かつた。ゴルメデの頭上に虹色の光のウイルス、カオスヘッダーが現れたのだ。

「あの光は！？」

と言うトイガキの問いにハルカが答えた。

「カオスヘッダー！」

テックサンダーのコクピットでも・・・

「カオスヘッダー！？そんな今まで反応が無かつたはずだ！」

ヒウラがあることに気づいた。

「まさか、カオスヘッダーはこれを狙つていたのか！？」

カオスヘッダーはゴルメデから生命エネルギーを根こそぎ吸い取つた。

「ゴルメデの生命エネルギーが・・・。」

カオスヘッダーはコスモスがフルムーンレクトを放つてゴルメデが大人しくなるのを狙つていたのだ。ゴルメデがあまりに凶暴が故に

とりつくのは容易でないためだ。

カオスヘッダーはそれを元にカオスゴルメデを作り上げた。ゴルメデとの違いは頭部がカオス化を示す赤に変化していることだ。カオスゴルメデは、後ろにいるゴルメデに向かつて強力な破壊光線を放つた。ゴルメデはエネルギーを奪われかわす力すら残つていなかつたためにまともにくらい絶命してしまつた。それを見ていたコスマスはカオスヘッダーに激しい憎しみを抱き、次の瞬間、燃えるような赤い光に包まれ強さのコロナモードに変化した。

地上で見ていたハルカたちもその変化に気付いた。

「コスマスが変わった・・・」

「あれは、強さのコロナモード!」

コロナモードとなつたコスマスはカオスゴルメデに向かつて走つた。それに反応するかのようにカオスゴルメデもコスマスに向かつてきた。お互いは激しくぶつかつたが力ではコスマスが勝つていた。コスマスは、すぐにパンチやキックといった攻撃技を繰り出し、カオスゴルメデを圧倒していった。

「何て強さだ・・・」

「さつきまでとはまるで違う・・・」

カオスゴルメデは反撃と言わんばかりに破壊光線を放つてきたがコスマスのサンライトバリアに阻まれた。コスマスはそのバリアをカオスゴルメデに向けて押し出し、カオスゴルメデを攻撃した。そしてコスマスは、両腕を頭上に掲げた後、胸の前で回転させて気を集め両腕を突き出した。そこから超高熱火炎の圧殺波動を繰り出した。コロナモードの必殺技、ブレージングウェーブだ。

カオスゴルメデは、まともに受けて爆発した。

「よっしゃ!! カオスヘッダーを倒した。」

「やつたー! コスマスが勝つたー。」

フブキとハルカが安堵の声を上げた。

「コスモスは戦いを終え、空に飛び去つて行つた。

戦いには勝ちはしたもののEYESの面々は「ゴルメテを救えなかつた悔しさを浮かべていた。

「ゴルメテを救えなかつたのは残念だな。」
とヒウラが旨を慰めるように言った。

「ゴルメテを救えなかつたけど、ムサシ隊員も・・・」
ハルカは刺激しないように声をかけた。

「あ・・・あのー、私のことお聞きにならないんですか？」
ハルカは出過ぎた真似をしたことや自分のことを聞かないのか疑問に思つていたのだ。その時。

「おーい！」とハルカたちの後方からムサシが走つてきた。
「お前どうやって助かつたんだよ。」

と突っかかりながらフブキが聞いた。
「コスモスが助けてくれたんですね。」

それを聞いたハルカは一（ムサシって隠すの下手だなあ・・・）と思つた。自分がコスモスつて言つているようにハルカには聞こえたからだ。

ヒウラは軽く咳払いをして話を戻した。

「そういうえば君の事ちゃんと聞かないどだつたね。シノブからは助けてもらつたと聞いているが。」

「私の名前は、アマノ・ハルカです。出過ぎた真似をしてすみませんでした。」

「いや、ハルカちゃんは当たり前のことをしたの。謝る必要なんて・・・」

「僕もハルカちゃんに助けられたんだ。何も悪くないよ。」
とシノブとトイガキは責めないように優しく言った。
「でもEYESの機体に触れたようなものですよ。」
とハルカは言った。

「確かにそうだが、今回は不問にしておくよ、ハルカちゃん。」

「本当にすみませんでした……」

「だから・・・ハル力ちゃんは悪くないのに・・・」とムサシに言われたハル力を思わず赤面してしまった。憧れのムサシに優しくされたためだ。

「じゃあ皆無事だし、帰還するか。」

「了解！」

「ハル力ちゃん、家まで送るよ。」とムサシに言われたがハル力は困つたように答えた。

「あ・・あの私行くアテが無いんです。この世界の人間じゃないんですね。」

「どういうことなの？」

「私、パラレルワールドから来たんです。詳しいことは後で話します・・・。」

状況を理解できなかつたが、ヒウラは彼女を心配して提案した。

「このままトレジャー・ベースに来るといい。それに世界のことをよく知ってる少女って君かもしれないから」のまま入隊つてのはどうかな？」「

その提案にムサシを除く全員が反対した。

「キヤップ。こんな子供を我々に加えるんですか？」

「そうですよ。今のは軽率だと私は思います。」

「こんな子供を危険な目に遭わせるんですか？」

しかし、ハル力は本気だった。

「私に出来ることがあると思うんです。だからこの世界に紛れ込んだのかも知れません。でも、やれることを精一杯やりたいんです！」

するとムサシが優しい笑みを浮かべながら言った。

「分かった。僕も君なんじやないかつて思つてた。この世界をよく知る少女が。僕たちと共に頑張ろう。」

するとハル力はさつきよりも赤面してしまった。

「大丈夫？」とシノブに聞かれたがあまりのムサシの優しさで頭がいっぱいになつていた。

反対していた3人もハル力を認めた。

「これからヨロシクね。ハル力ちゃん。」

「意外なキヤップの人選だけどこれからよろしくハル力隊員。」

「まあ足手まといにはなるなよ。」

3人に言われたハル力は落ち着きを取り戻しEYES式の指を2本立てる敬礼をした。

「お、敬礼の仕方知ってるんだな。」とヒウラは感心した。

「ええ、何度も見ていたんで。」とハル力は得意げに返した。

「よーし、新入隊員も来たことだし帰還するぞ。」

「了解!!」

新たにハル力を加えたEYESはトレジャーベースに向け、帰還して行つた。

第1話「優しさと強さの英雄」（後書き）

TEAM EYESに入隊したハルカ。だがハルカは、世界の危機を知り使命の大きさを知る。

次回、ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド第2話「新たなる敵」

3つの世界を取り戻し、未来を切り拓け！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5458z/>

ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド

2011年12月26日20時52分発行